

## 歴史的現実

われわれの生き方

戦時中、田辺元博士の『歴史的現実』という小冊子が出版された。これは先生が、信濃教育会で行った講演の速記であったと記憶するが、先生がこの中で試みられたことは、「時間の構造」という問題の解明であった。

普通、時間というものは、水の流れのように、過去から現在へ、現在から未来へと、直線的に進行するもののように理解されている。ところが、先生によると時間というものは、いつも現在であつて、その永遠の現在こそは、常に未来を志向する力と過去に執着する力との二つの相反した方向に働く力の緊張した相剋とバランスの中にあるといわれるのである。

私はこの本を読んで深い感銘を覚えただけでなく、その後における私のものの見方や、考え方に大きい指針を与えられたように思う。先ず現在こそはわれわれにとつて、無限の選択の可能性の中で選ばれた唯一のものであり、かけがえないものである。したがつてわれわれは、この現在に真剣に取り組む以外に生きる手だてはない。しかもその現在は、

未来と過去との相反した方向に働く力の相剋の上にあるのだから、過去のな引力を無視して未来をのみ志向することは、いわゆる革命となり、未来に目を蔽い、過去にのみ執着することは、いわゆる反動となる。その何れもが正しい歴史的实践とはいえないというのが先生の教えられたことであるように思う。

歴史的な現実というものがそういうものであるならば、その現在という「永遠の今」を、真剣な実践で埋めて行ったならば、われわれは一体どこに辿りつくことになるのであろうか。それが次の問題になってくるように思われるが、田辺先生は、そういう問題に対しては賢明にも答えられてはいない。その答はいわば神の手にあるのであって、人間の分際では到底答えられるものではないのではないだろうか。人間にできることは、せいぜい現在を真剣に生き抜くことだけだというのが先生の言わんとされたことだと思ふ。

先日私は、フランスの文豪アンドレ・モロアの晩年の随筆集を読んだ。その中に「あなたの天国」と題する一文があった。この中でモロアは、もし自分が天国行きの手ケットを手に入れて天国に行つたとしたら、自分は何を求めるだろうかと自問自答している。そしてモロアは、先ず妻や子供や親友たちを天国の仲間として要求するであろう。次に自分は

仕事がほしいし、机や万年筆や多量の原稿用紙を求めるであろう。つまり、現に自分がこの地上で求めているものを、そっくりそのまま天国においても求めていることに気がついたというのである。すなわち、青い鳥は山の彼方に遠く住んでいるのではなく、自分の庭先に巣くっているのだということである。

私は今日内外の情勢というものも、いま申し述べた「現在」とよく似通った構造や、趣きをもっているのではないかと思う。今日の状況はなるほど大きい戦争が火を吹いてはいない、と行ってスッキリした平和の状態でもない。強い信頼の基盤もないが、そうかといって系の切れたた、このような全くの混沌でもない。いわば灰色のどんよりした不安定な状況である。しかし、この現実こそは、われわれにとつては唯一無二のもので、かけがえないものである。神が無限の可能性の中から、われわれに与えてくれた唯一無二の贈物であるとは考えられないものだろうか。われわれはこの現実を大切にして、先ずこの状態より若干でも後退することがないよう、用心深く備えるところがないければならない。他方において、少しでも改善の道がないものかと、真剣に模索するところがないければならない。それ以外に分別らしい分別はなさそうに思う。